

私と作者の「あいだ」—作品からのメッセージ

2023年 9月7日(木) – 12月10日(日) 会場: 常設展示室

※月曜休館 ただし、9月18日(月・祝)、10月9日(月・祝)は開館、9月19日(火)、10月10日(火)は休館

※開館時間 9:30–17:00 ただし、9月8日(金)、9日(土)、15日(金)、16日(土)、12月1日(金)、2日(土)、8日(金)、9日(土)は19:00まで開館。

※学芸員によるギャラリートーク 9月23日(土・祝)、10月14日(土)、11月19日(日)

対話型鑑賞会: 9月18日(月・祝)、11月23日(木・祝) いずれも14:00より

はじめに

みなさんは、作品を見るとき、どのようなことを考えますか？ 絵に描かれている人の気持ちや、風景に響く音を想像したり、時の流れに思いを馳せたりしたことがあるのではないのでしょうか。私たちは、作品を目の前にしたとき、知らず知らずのうちに、目に映らない要素をも想像によって感じ取っています。裏を返せば、作品における余白や、はっきりと描かれていない部分には、自由に想像できる余地があるのです。

たとえば、南薫造《絵を描く友人》(No.15)は、カンヴァスに向かう友人をモデルとした作品ですが、その姿が真横から捉えられているために、友人がどのような絵を描いているか、うかがい知ることはできません。カンヴァスに描かれた内容は、見る人(「私」)の想像に委ねられているといえるでしょう。また、桑田笹舟《いかにして》(No.23)は、和歌を散らし書きにした四曲一隻屏風で、紙の余白を存分に生かしています。一番右側の第一扇には一文字も配られていませんが、白い紙の地がかえって墨の黒さを際立たせ、筆運びの軌跡を伝えてくれます。羽田桂舟《叢行憩禽図》(No.22)は、生い茂る竹林の中で、羽を休める一羽の鳥を描いた一幅です。鳥を囲む竹の葉が、墨の濃淡によって描き分けられており、空間に奥行きを生み出しています。竹が風に揺れ、葉のすれ合うさわやかな音が、あたりに響くようです。

本展では、こうした想像できる余白としての「あいだ」に注目します。あいだは作者と私の間に生まれ、同じ作品でも見る心が違えば、柔軟に変化します。作者本人の言葉を手掛かりとして作品に近づく方法もありますが、一方で、想像しながら作品を見つめてみると、自分の心の中に隠れていた願いや思いに気づくでしょう。あいだは私が作品から受け取るメッセージであり、対話が生まれる可能性を秘めているのです。みなさんも、心を空っぽにして作品を受け入れ、作品から届くメッセージに耳をすませてみてください。



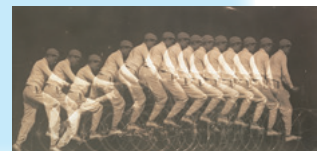
No.23 桑田笹舟 《いかにして》

白と黒との関係



No.4 土屋幸夫 《時》

バイオリンとコマという
不思議な組み合わせ



No.2 エライエンヌリジュール・マレ 《一輪車に乗る男》

目に見えない時の流れの捉え方

どんな「あいだ」を
見つけられるだろう？

私の名前は「アイダー」！
「あいだ」探しが大好き！



No.10 白瀧幾之助 《至四》

表情が見えないひとびと



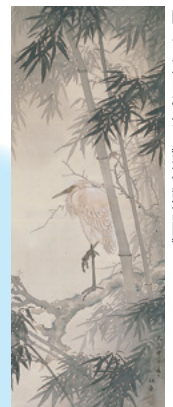
No.15 南薫造 《絵を描く友人》

何が描かれているかわからないカンヴァス



No.18 大村廣陽 《双鹿図》

余白に響く鹿の声



No.22 羽田桂舟 《叢竹憩禽図》

墨の濃淡によって生み
出された空間の奥行き

私と作品と作者との関係は、どうなっているだろう？

作品は、作者がいない空間でも、「私」と作者をつないでくれるものだよな！

作品における余白や、はっきりと描かれていない部分には、自由に想像できる余地がある。その「あいだ」に注目すると、私たちは経験や記憶をたよりに想像を膨らませながら、作品に近づくことができる。

私

作品

「あいだ」は決まった形を持たないし、はじめも、おわりもない……。

作者がどのよう

な思いで表現したか。作者の言葉が残っていることもあれば、全く残っていないこともある。残っていれば、作者の言葉を手がかりとして、作品に近づくことができる。

作者



骨を描くことは死を描くこと

「骨が見てきた時間を描きたい。気の遠くなるような長い長い時間が紐解いてきた生命の造形美の輪郭を、真摯に、冷静に辿ってゆきたい。骨を描くことは死を描くということだ。そこには永遠に沈黙する美が、静謐で厳肅な孤独が横たわっている。骨を見つめる私の精神の奥底にその輪郭が立ち現れるのを辛抱強く待たなければならない。そして人間の最も本質的なところを、人生そのものを描きたい。」

(『聖なるもの 野田弘志画集』求龍堂、2014)

部分

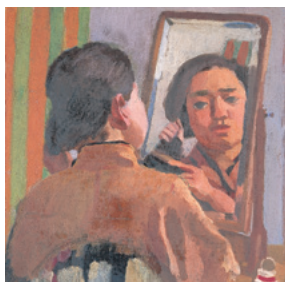


No.6 野田弘志 《ガラスと骨II》

時間が経った骨の白さ

ガラスの瓶に入っているのは、何の動物の骨だろう？「白骨化」っていうけど、そういえば「白」っていう漢字は、人間の頭の骨の形を象ったものなんだって！なんだか骨の白さに時の流れを感じるなあ……。

顔や眼にやどる心の美



No.13 小林徳三郎 《鏡》



アイダーの姿は、門のスキマから月の光が見える景色に由来するんだよ！

女の子が髪をとかしているね！真剣な表情で、どこを見ているんだろう？自分を見つめているようにも、鏡を通して作者と目が合っているようにも見えるなあ。もっと想像をふくらませると、女の子が見つめているのは、この絵を今まさに眺めているみんな、とも思えてきたよ。

鏡に映るまなざしの先

「麗子の肖像をかいてから、僕は又一段或る進み方をした事を自覚する。今迄のものはこれ以後にくらべる

と唯物的な美が主で、これより以後のものはより唯心的な域が多くなってゐる。即ち形に即した美以上のものその物の持つ精神の美、全体から来る無形の美、顔や眼にやどる心の美、一々に云へば深さ、この事を僕はこの子供の小さい肖像を描きながら或る処まで会得した。」

(「自分の踏んで来た道」『劉生画集及藝術観』聚英閣、1919)



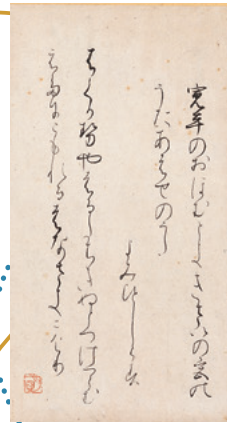
No.8 岸田劉生 《麗子十六歳之像》

古人との対話

「臨書」^{りんしょ}ってというのは、人の字をまねて書くことなんだって！ この作品は、今から1000年くらい前の人が書いた文字をまねたらしいけど、名前も顔も誕生日も分からない人の字なのに、なんでそんなことするんだろう？

そうだ！ みんなは、何かをまねしてみた時、ぴったり同じにならなかった経験はないかな？ たとえば、友だちと同じモチーフを見てスケッチしても、出来上がったものを見比べたら違う絵になってるよね！

「臨書」も同じで、まねして書く過程で、自分の見方や息づかいが吹き込まれるんだ。まねは「まねぶ」だから、学ぶこと。まねをしても、人それぞれにちがう形になるからこそ、面白いんだね！



No.7 桑田笹舟 《臨 高野切第一種》

何かを見出す臨書

「臨書というものは、創作能力の根のない臨書であってはいけません。ただ、ものをまねするのでも、そこに何かを見出して、生み出してくるものがなくてはならない。」

(『桑田笹舟』ふくやま美術館、1990)

どこまでも続く羽ばたき

なんだか、鳥の翼みたい！ 柔らかい陽ざしに照らされて、果てなく遠いところから鳥がやってきたようだね！ 画面右上から翼が飛び出して、どこまでも大きく羽ばたいていくような動きが見えるよ！ みんなには、何に見えるかな～？



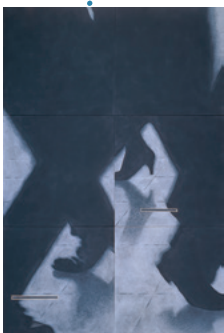
No.32 野田正明 《FROM BEYOND (彼方より)》

「内包と拡散の間に生まれ、静と動の出会いは、経験の場を超えて、次への発展を待つ。」

(『MASAAKI NODA: The Work in New York 1980-1991』阿部出版、1991)

内包と拡散の間

虚構の現実を体験



「私の作品に観客が近づき、私の提出した虚構^{きょこう}の現実を体験し、そこに臨んでい

る事に驚き、その小さな驚き^{しげき}が、人々の生きるエネルギーを刺戟し、日常の出来事を越えて驚きが驚きに終らず、各々の想像力によって揚げられて行かだろ。」

(吉原英雄「版画と臨場感」『三彩』239号、三彩社、1969)

No.5 吉原英雄 《二つの地平-残像12》

男性が「トントン！」って女性の肩をたたこうとしているよ！ あと少しで女性の肩にふれられるけど、作者はどうしてこのポーズを選んだんだろう？

「ふれたいけど、ふれられない」みたいな気持ちの迷いを表したのかなあ……。

だけど、見て！ 男性の手は女性の肩の丸みに沿って、曲がっているよ！

なんだか、やわらかくて、あたたかくて、優しい感じがするね。



側面部分



No.17 今城国忠 《湖底双樹》

ふれそうでもふれない距離

作品をじっくり見て、想像してみよう！



No.21 羽田桂舟 《秋景煎茶図》



アイダーはこんなふう感じたよ～。

おじいさんは、どこをながめて、なにを考えているんだろう？

秋の山はいろどりが
豊かじゃけえ、きれいじゃあ！
こぎゃあにして景色を
見ながら一服するんも
ええのう。



部分

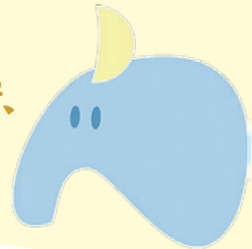


作品をスケッチし
ました！

おじいさんと男の子はどんな話をしているんだろう？

「坊や、お茶はまだかのう……。」
「もう少しでわきますよー。
うちやであおいで火が消えんように、
消えんように。」

みんなも好きな作品を選んで、
想像したことをかいてみよう！



私だけの物語を
つくるのもすてき！

作品をスケッチし
ました！

言葉でも絵でも
自由にかいてみよう！

作者名

作品名